

静岡の高校サッカー 戦後の球跡

51

高校生年代でいち早く4・2システムを採用した静岡工が、1975年昭和50年)度、一気に爆発する。

県新人大会は準決勝で敗退した。しかし、「負ければ必ず借りを返した」とのサイドバックだった石神良訓(「J警田スタッフ」の言葉通り、奮起した総体県予選は決勝に勝ち上がった。相手は清水東。新チーム

結成後、1勝2敗と負け越し、下馬評でも劣勢だったが、そんな前評判を覆し、立ち上がりから攻勢に出た。前半20分、小気味よくパスをつなぎ、岸登志満(不動産業)がとどめを刺して

静岡工 ⑤完

【1975年度全国選手権先発メンバー】	【1975年度全国選手権先発メンバー】
GK 山高渡	MF 木橋
FB 高渡	MF 石神
HB 高渡	MF 吉落
FW 高渡	FW 石渡



1975年度全国選手権表彰式。初出場準優勝の快挙にも笑顔はなかった—大阪・長居競技場

勝負の厳しさを味わった選手たちは、総体の無念さで退け、準々決勝はPKを晴らすべく、全国選手権予選に挑み、見事に勝ち抜いて初代表権を獲得した。初めて臨んだ全国選手権だったが、主将の落合信彦(田技研)ら選手たちは臆することなく、持ち味のつなぐサッカーを展開した。初戦(2回戦)は東予工

初の選手権 光放つ準V

南(埼玉)だったが、前半29分、落合のスローインを吉田弘(日本サッカー協会)が頭で流し、平井文晶(シード)がハーフボレーで入り込んで先手を取った。練習通り(平井)の先制シーンだった。ところが、後半、マークがずれたところを田嶋に突かれて2失点。1-2で逆転負けを喫した。頂点には立てなかった。しかし、石神、吉田の後の日本代表コンビや独特の得点感覚を持つ大石和孝(法大監督)といった、個性派集団が繰り広げるサッカーは光彩を放っていた。

全国に十分すぎるほどのインパクトを与えた、初出場準Vから33年後の2008年(平成20年)度、学校再編により、静岡工サッカー部は60年余りの歴史に幕を閉じた。(敬称略)

〈次回からは「藤枝北」〉
加藤訓義
(スポーツライター)
6日から掲載します